



TITLE:

# シャルとブルトン:ルネ・シャル ルのシュルレアリスム参加の時代 を中心に

AUTHOR(S):

吉本, 素子

---

CITATION:

吉本, 素子. シャールとブルトン:ルネ・シャルのシュルレアリスム  
参加の時代を中心に. 仏文研究 2004, 35: 151-167

ISSUE DATE:

2004-09-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/137951>

RIGHT:

# シャルとブルトン

——ルネ・シャルのシュルレアリスム参加の時代を中心に——

吉 本 素 子

## 序

ルネ・シャルは、後に自ら否定しなかった詩集としては最初の詩集『兵器庫<sup>1)</sup>』に収録される詩を一九二七年から書き始め<sup>2)</sup>、一九八八年の死の三ヵ月前に印刷に渡された『疑われる女への讃辞』まで<sup>3)</sup>、ほぼ六十年間という長期間に渡って詩作を続けたが、そのうち、集団的な文学運動に参加したのは、故郷で一九二九年にわずか三号だけ出版した雑誌『メリディヤン』発行<sup>4)</sup>を除けば、シュルレアリスム運動への参加のみである。シャルは一九二九年八月にまずエリュアールと、十一月末にパリでブルトン、アラゴン、クルヴェルらと出会い、十二月に『シュルレアリスム革命』の十二号に詩を掲載し<sup>5)</sup>、以後、シュルレアリスムの雑誌に寄稿し、あるいは共同の詩集に参加し、又政治的な文書に署名するという形で、この運動に参加している。

シュルレアリスム運動の中心であったブルトンとは、一九三〇年、エリュアールと三人の共作詩集『工事中、徐行せよ』を出版し<sup>6)</sup>、あるいはアラゴン、ブルトンの間に確執が生じた一九三二年には、ブルトンを擁護するパンフレット『ピエロ！』をルネ・クルヴェルとともに起草している<sup>7)</sup>。しかし、一九三三年に創刊された雑誌『ミノトール』には協力せず<sup>8)</sup>、一九三五年十二月の『パンジャマン＝ペレへの手紙』でシュルレアリスムの見解に批判を加え、以後運動から遠ざかるようになる<sup>9)</sup>。この運動への参加の期間にシャルが作品においてブルトンの作品からどのように影響を受け、独自性を確立していったのかを検討するのが本稿の目的である。シャルの作品は、主として一九二九年十二月から一九三五年十二月までを扱うが、一九三六年十二月に出版された『ムーラン・ブルミエ<sup>10)</sup>』は、この間に書かれた断片を含み、又シャルのブルトンへの最終的な姿勢を示すものなので、この詩集も考察の対象とする。又、運動に参加する以前の作品も、シャルの本来の特質を示すものとして、必要に応じて参照する。

## 1. ブルトンからの直接的な影響

### (1) シュルレアリスム参加当初の希望—「自由」の獲得

シュルレアリスムへの参加の当初、シャルの作品の中では、「自由」という語が多く見出さ

れる。ルネ・シャルにとって当時の根底的な希望は、「自由」の獲得であったように思われる<sup>11)</sup>。そしてこれは、まず、この運動への参加の最初の作品に、明確に表現されている。『シュルレアリスム革命』十二号に掲載された「被験者の信条告白」の冒頭は、

一月。—私はついに、かいま見られた、この「自由」(Liberté)に触れる—<sup>12)</sup>

で始まる。これは、ブルトンの『シュルレアリスム宣言』の「自由という語だけが、まだ私を熱狂させる<sup>13)</sup>」「私たちが受け継いでいる多くの醜悪さの中で、精神の最大の自由は私たちに残されていることを、認めなければならない<sup>14)</sup>」という文に呼応したものと、思われる。「自由」という単語が大文字で始まることにより、ブルトンの文の引用であることが暗示される。この詩は、一月、二月、……と一ヵ月ごとに進行し各月が節を成しているが、最後の十二月に、「……沈黙のかなたですべてを掴むのを覚悟して、その沈黙のところで、しかしながら貧しい『自由』は不屈の喧騒を消す<sup>15)</sup>」と、再び「自由」が言及される。「自由」は喧騒を消し去り沈黙をもたらすことから、それは表現、言葉に関するものだ、ということが理解される。この「自由」は、今までも「かいま見られていた」、すなわちわずかに予感されていたが、今「ついに」到達された、と語られる。シュルレアリスムへの参加により、予感にすぎなかった解放が、真の解放になる、という期待が述べられている。

さらに、一九三〇年七月の『革命に奉仕するシュルレアリスム』の創刊号に載せられた作品のタイトルも「自由の昼と夜<sup>16)</sup>」である。この作品からはシャルの志向した「自由」のより多面的な性格が理解される。「被験者の信条告白」に見られたのと同様に、表現についての自由も記述されている。それは、『『本のように』正しく語ろうと努める人々<sup>17)</sup>』への反抗の形で語られ、伝統的な教育、教養からの自由と考えられる。さらにここでは、後に『正義の行為は消え果てている』の中で、「ローラ・アバの亡霊<sup>18)</sup>」としてより鮮明に描かれる死者との神秘的な体験が暗示的に語られ、このことが、「恐怖のもとでの自由<sup>19)</sup>」とされている。これは理性、合理的なるものからの自由と言えよう。さらにこうした理性、合理的なるものを基盤とする西洋近代文明からの自由への志向として、非西洋世界である「中国の地<sup>20)</sup>」が「精神的な(spirituels)領土<sup>21)</sup>」と称賛され、「野蛮(barbarie)<sup>22)</sup>」の再建が提唱されている。あるいは、キリスト教、「道徳(Morale)<sup>23)</sup>」からの自由も希求されている。

しかし、この作品からは、自由はこうした内面的な側面にばかり関わっているのではなく、社会的な側面を持っていることが読み取れる。ここでは、「母」が家庭の象徴として登場し、そこからの自由が求められ、又作者の分身とも思われるような共感とともに囚人が登場し、一般的な社会全体への反抗が示される。あるいはフランス国旗の掲げられる公共建造物の形で、現在の社会体制あるいはナショナリズムが記述され、それらからの自由が求められている。この作品では、自由の希求は漠然と、しかし極めて挑発的、直截に述べられている。反抗の対象は「資本主義世界<sup>24)</sup>」と呼ばれ、「公共建造物の全面的破壊<sup>25)</sup>」が「私たちの心を引くこと<sup>26)</sup>」とされている。こうした表現はシュルレアリスム参加のごく初期にのみ見られ、後にはより普遍的、象徴的なもの

に変わっていく。

「自由の昼と夜」に見られたシャルの自由の内面的な希求は、ブルトンと直接関連している。シャルのこの作品はブルトンの『シュルレアリスム第二宣言』に直接言及していることから分るように、この作品をはっきりと反映している。この中で、ブルトンは「論理 (logique) への反乱<sup>27)</sup>」を提唱し、「推論的知性<sup>28)</sup>」を超えるものを称揚している。あるいは、「西洋的思考の低俗さ<sup>29)</sup>」を非難する。しかし、シャルの自由への内面的な志向は、『シュルレアリスム宣言』をより鮮明に反映しているように思われる。ここでブルトンは「論理の支配下<sup>30)</sup>」からの脱出を唱え、「文明<sup>31)</sup>」「進歩<sup>32)</sup>」の名のもとに、「迷信<sup>33)</sup>」「妄想<sup>34)</sup>」として精神から排除されてきたものの復権を唱えている。さらに又、シュルレアリスムを「新しい悪徳<sup>35)</sup>」とも定義し、あるいはシュルレアリスムは「公衆道徳を犯し<sup>36)</sup>」た、として非難されるだろうが、「我々のすべての悪の原因である、現行の道徳<sup>37)</sup>」に代わる「新しい道徳<sup>38)</sup>」の必要性を主張している。

シャルの自由の希求の社会的な面も又ブルトンの影響がはっきりとかがわれる。「自由の昼と夜」の挑発的で直截な表現による自由の希求は、『シュルレアリスム第二宣言』の直接的な影響を感じさせる。この作品でブルトンは、シュルレアリスムは私的气晴らしに過ぎない、との批判を意識し<sup>39)</sup>、それに対抗するために、エンゲルスを援用する。あるいは「家族、祖国、宗教という理念を破壊するためには、あらゆる手段が使われてよいはずだ<sup>40)</sup>」といった表明は、「自由の昼と夜」に直接的に反映されている。しかし、シャルはブルトンのこうした社会的見解をこの後も全面的に共有するわけではない。シャルがブルトンから受けたより根本的な影響は、社会的次元での自由の実現を視野に入れるべきだ、という強い自覚である。『シュルレアリスム第二宣言』の中でも、シュルレアリスムは「行為 (fait) の次元で改善と思われるすべてのこと<sup>41)</sup>」を目指すとされているが、『シュルレアリスム宣言』で既に、「シュルレアリスムの行動 (action) への適用<sup>42)</sup>」が非常に重視されている。シャルの社会的な次元での自由への志向は、ブルトンの呼びかけによって促され、励まされて明確になっていったもののように思われる。

## (2) シュルレアリスムの方法：自動記述、催眠術の実験、夢の調査

ブルトンは、シュルレアリスムの実践のために、いくつかの方法を提唱している。『シュルレアリスム宣言』には、新しい精神的領野の探究が、この頃仏訳が出版されたフロイトの著作<sup>43)</sup>に影響されたものであることが表明されている<sup>44)</sup>。精神分析医は患者を被験者 (sujet) として検査や調査、結果の分析を行なうが、ブルトンもこれに倣おうと試み、ただし、対象を患者ではなく自己自身で行なうことを提唱する。客観性を志向したこうした方法意識は、シャルは、ごく初期にのみ、しかもかなり批判的に受け入れているようだ。

既に触れた「被験者の信条告白」が最も明確にこうした科学的な方法意識を表明している作品である。ここでは、「私」が「被験者」と定義されている。又、「私」が経験することは、épreuve<sup>45)</sup>とされているが、この語も「実験」の意味を持っている。ここでは、「私」のまわりに「調和に満ちて<sup>46)</sup>」置かれた「なじみ深い事物<sup>47)</sup>」、すなわち今まで受け入れられていた安定と調和を感じさせる世界と対立して「私のこのうえなく秘密の希望<sup>48)</sup>」が置かれ、この希望は、「あの

動く大なる微光<sup>49)</sup>」とされている。つまり、科学的な方法による内面の探究が日常の世界に対置される隠されたものを明るみに出すことが予測され、このことは希望であり、又大なる光であるとされており、未来を照らし出す非常に肯定的なものと捉えられている。しかし、科学的用語をはっきり使用している非常に数少ない作品であるこの詩でも、既にこうした方法へのシャルのためらい、批判的感情が見られる。二月の節では、「この取るに足りない実験 (épreuve) は、いかなる新しい経験も私にもたらさなかった<sup>50)</sup>」と幻滅が表明されてから、「いや、不快ではないある種の重力の経験<sup>51)</sup>」は得られた、と言い直され、七月の節では「その血が私の血管の中に生きている問題の男は秘密を委ねなかった<sup>52)</sup>」と結局隠されているものの探究が成功しなかったことが示される。最後に登場する「自由」は「しかしながら貧しい (démuni)<sup>53)</sup>」と形容されている。

この詩の実験が具体的にシュルレアリスムのどの方法を指しているのかは、理解しにくい。それは、この詩がシャルの言葉、沈黙といった根源的な主題を扱うことを重視しているためだと思われる。しかし、「大地はもはや私の靴の延長の中にはない<sup>54)</sup>」と述べられている重力の感覚、「私の思考におけるこの感覚は流動的で耐えがたい。夜は『永遠の運動』に滑り込むこの感覚を受け入れる<sup>55)</sup>。」などの文から、この実験は、ブルトンの一九二四年に出版された『失われた歩み』に収録された「霊媒の登場」に書かれている催眠術の実験<sup>56)</sup>ではないか、と思われる。

一九三一年七月に出版された『正義の行為は消え果てている』の中の「詩的精神」ではこの実験への否定的感情がよりはっきりと見られる。この中に「ちょうどよい時に、柳腰の (à taille de guêpe) 若い娘が現われ、雄鶏の喉をえぐり、それから嗜眠 (le sommeil léthargique) に陥り、その一方、彼女のベッドから数メートルのところでは大河全体とその危険が流れている<sup>57)</sup>」と書かれている。「嗜眠に陥る」この若い娘を、ジョルジュ・ムナンの言うように超現実と捉え、ここに幻滅の感情を読み取ることは、正当に思われる<sup>58)</sup>。ここでは、催眠状態で超現実が体験されるが、「大河とその危険<sup>59)</sup>」は眠りを象徴するベッドから離れたところを流れている。『正義の行為は消え果てている』の一九三四年版では、「柳腰の若い娘」は「てんぐだけのような腰 (à taille d'amanite) の若い娘<sup>60)</sup>」に変えられている。この表現は、「娘」の形容をこっけいなものにし、又卑小さを強調しているように思われる。一方、眠りと離れたところで流れているのは、危険を孕む「大河」である。「大河」は真の詩を象徴しているようだ<sup>61)</sup>。すなわち、ここでは、催眠術の実験は卑小なものとして揶揄され、真の詩はそれに対して超然と、危険を伴いながら存在し続ける、と述べられているように思われる。

シャルは最初から催眠術の実験に批判的な感情を持っていたとしても、眠りと夢の創造力に関する豊饒さについては、強い関心を持ち続けている。ブルトンは、『シュルレアリスム宣言』でも夢の「系統だった調査」を提案している<sup>62)</sup>。又『シュルレアリスム革命』は多くの夢のレシを掲載している。さらに、一九三二年に出版された『通底器』には、夢の記録とその分析が書かれている。シャルも、夢のレシを発表するが、これはシュルレアリスム参加の比較的后期の一九三二年のことである。この作品は、五月に、『革命に奉仕するシュルレアリスム』の六号に掲載されたが、その時の標題は、「私が運命づけられているもの (à quoi je me destine)<sup>63)</sup>」である。

すなわち、この標題には、夢が夢を見ている人間の未来の志向を示すものだ、という考えが表れている。これは、ブルトンの『通底器』の中の夢による、欲望などの主観的な心の機能の研究は、現実の世界の困難な問題の解決に有効だとする主張<sup>64)</sup>に影響を受けていると思われる。しかし又シャルがここでse déstinerという単語を使用したのは、夢が関係している個人の運命の内在的で必然的な性格を示したい、という意図もあったからではないかと思われる。ジャン・クロード＝マテューは、この夢のレシを、大河、地下室、棺などの典型的な夢の大きな表象を持ち、子宮内への退行、母による去勢の恐怖、近親相姦の欲望、母の支配からの解放といった精神分析的な解釈を可能にするものとしている<sup>65)</sup>。ここでは、このテキストを夢のレシのモデルに合致させるために、覚醒時の印象がイタリック体で書かれている<sup>66)</sup>。この印象は、夢の解釈、あるいは分析ではないが、夢と解釈をつなぐ橋わたしのような役割を持っている。このテキストが、河で溺死し、棺の中で発見され生き返る子供という形で、死と再生の物語となっている点に注目しておきたい。

しかし、シャルは、『ムーラン・ブルミエ』を発表する時点では、夢を調査し、分析する、夢への科学的な接近自体に反対しているようだ。『ムーラン・ブルミエ』の中ほどに置かれた「小説風の特別保存書籍」で始まる断章では、古文書に書かれた物語という形で、休暇に故郷に帰ったド・フェラポルト氏が母の葬式に出会い棺に入れられていた母を抱き締めると、母が息を吹き返す、というエピソードが書かれている<sup>67)</sup>。夢は、このエピソードの中で、生き返った後の長い眠りの中で、ド・フェラポルト夫人が見たものという形で現われている。この断章でも「私が運命づけられているもの」で書かれていた死と再生の主題が、夢の枠組である物語の中で、繰り返されている。恐らくシャルは夢を、人間の最も根源的な条件である生と死に関与するものと考えていたのではないだろうか。この断章の最後には次のように書かれている。「罪をひどく好む唇が、か弱い子供たちのために、たどたどしく読んでいる。『夢を見ているライオンに、穿頭術を施すな。』そうすれば、未来は豊饒だ<sup>68)</sup>」「罪をひどく好む唇<sup>69)</sup>」は現在の道徳に反抗するシュルレアリスムに共感する姿勢を暗示しよう。しかし、『夢を見ているライオンに、穿頭術を施すな』という文は、夢を科学的に分析することへの反対の表明と取れよう<sup>70)</sup>。

最後に、「自動記述」とシャルの関係について検討してみたい。シャルの作品には、『シュルレアリスム宣言』の中でブルトンが提唱する「自動記述」によって書かれた、と言明しているものは一つもない<sup>71)</sup>。ただし、書く行為を「自動記述」は「批判的精神が全く判断力を及ぼさない<sup>72)</sup>」状態、「理性のどんな制御もない<sup>73)</sup>」状態に置くことを目的とするものであり、ブルトンは具体的に文が論理的になってきたら、何でもよいが例えばIで始まる単語を置く、という形で恣意性を導入するように、と提案している<sup>74)</sup>。意味の連続性を乱すために、単語の音の要素によって詩を書いていくこと、例えば子音あるいは母音も繰り返すことで詩行を作り出していくことは、シュルレアリストの詩に非常にしばしば見られる。ブルトンもこの方法で予想外の美しさに満ちた多くの詩行を書いているが、例えば『白髪のリヴォルヴァー』の「上ったり降りたりする道で<sup>75)</sup>」を例に取ってみよう。この詩は、“Dites-moi où s'arrêtera la flamme / Existe-t-il un signalement des flammes<sup>76)</sup>”（ぼくに言ってくれ、炎はどこでとまるのか／炎の人相書きは存在するのか）と

詩行の終りで flamme が繰り返されることで始まる。そして、恋愛を暗示し、自己に関する考察を織りまぜながら都市と城と海に関する鮮烈なイマージュを作り出していくこの詩は、flamme のイマージュによって導かれていくばかりでなく、この単語に含まれている [f] [m] の音が “fleurs<sup>77)</sup>” “mer<sup>78)</sup>” “phares<sup>79)</sup>” “femmes<sup>80)</sup>” “l’hémisphère<sup>81)</sup>” “rames<sup>82)</sup>” “mares<sup>83)</sup>” “méduse<sup>84)</sup>” “fenêtres<sup>85)</sup>” “fougère<sup>86)</sup>” “feuillages<sup>87)</sup>” “filet<sup>88)</sup>” “feuilles<sup>89)</sup>”などを産み出していくことで織り成されている。シャルの詩は、シュルレアリスムの参加の時代でも、ブルトンより音より意味に比重がかかっているが、それでもやはり、音が詩を作り出していく例は随所に見られる。例えば、マテューは、“Artine”において、Artine が含む音が、“Artine traverse sans difficulté le nom d’une ville<sup>90)</sup>” “Artine gardait en dépit des animaux et des cyclones une intarissable fraîcheur. A la promenade c’était la transparence absolue<sup>91)</sup>”のように四節目、七節目を産み出している、と指摘している<sup>92)</sup>。

しかし、シャルはシュルレアリスム参加の後期には、「自動記述」そのものにはかなりはつきり批判を示している。一九三二年に大部分が書かれた『戦闘の詩』の中の「大金持ち<sup>93)</sup>」を検討したい。錬金術に言及しながら始まる複雑で多重の意味をもつこの詩は、シュルレアリスムへの両義的な評価を示しながら、独自の詩法を語る詩とも解釈される。その中に、「言葉たちが『自動装置』(Automate)を修復する<sup>94)</sup>」という詩行が見られ、これは、自動記述 (Automatisme) を揶揄する表現と考えられよう。その後で「非常にがっしりした言葉たちが、しなやかな橋の上で掴み合いのけんかをしている<sup>95)</sup>」も、シュルレアリスムの多くの詩の中で、言葉が生産性とは対極的な無秩序状態に陥っていることを揶揄しているものと思われる。

以上のように、シャルはブルトンの提唱する実践的方法には、かなり批判的であったように思われる。

### (3) 原理的な理念への共感

しかし、シャルはブルトンが主張する恣意性の称揚や偶然の重視、直観の重視などの原理そのものには、強い共感を示している。

ブルトンは『シュルレアリスム宣言』の中で繰り返して恣意性を称揚している。例えば、「最も強いイマージュは、最も高い度合いの恣意性を示すイマージュである<sup>96)</sup>」と、述べている。又、人間の精神をかき乱し、錯乱させるものとして精神に対する偶然 (hasard) の働きかけの重大さを指摘している<sup>97)</sup>。これらは精神を意思や論理性の束縛から解放するものとされている。シャルはこうした理念を積極的に受け入れ、そこから彼の詩の世界を出現させているように思われる。例えば、「アルティヌ」の中で、二人の愛人の走る様子は、野外劇にも匹敵するものとされているが、彼らは、「街道の広がりになんて (au hasard des grands chemins)<sup>98)</sup>」進む。あるいは、「詩的精神」の中には、恐怖の魅惑を示すイマージュとして、「人気のない野原を横切り、夜、二人の沈黙した長い散歩<sup>99)</sup>」が現われるが、これは「夢遊病の豹を伴って」いる。

あるいは、ブルトンは『通底器』の中で、感情を仲介に関係が結ばれる人間の内面は、外的客観的な認識力とは別のものであり、その探求のためには、直感的認識力 (connaissance intuitive) を検討することが必要であるとして直感的認識力を重視している。夢や詩の研究はそれに有益な

ものと位置づけられる<sup>100)</sup>。シャルも一九三二年の「ポール・エリュアール<sup>101)</sup>」という作品の中で、「驚異は直観、絶対的影響力だと考える人々に、それが一つの体系だと考える人々が対置される<sup>102)</sup>」と書いている。後述するように、この頃、シャルは「体系」に対する批判を示している。つまり、ここで、シャルはブルトンがその詩学の中心に置いた「驚異<sup>103)</sup>」そのものが「直観」だとするほど「直観」を重視している。

ブルトンの理念のうちでシャルのシュルレアリスム参加の時代に非常に実り豊かな作品群を産んだものは、想像力による精神、特に欲望の解放の強調である。『シュルレアリスム宣言』の中では、人間が全体として自分自身のものである、ということは恐ろしい欲望の群れを無政府状態に保つことであり、それを教えるのはポエジーだ、としている<sup>104)</sup>。又『シュルレアリスム宣言』の中では、シュルレアリストたちのところでは、退廃（*démoralisation*）の精神が住みついている<sup>105)</sup>と書き、あるいは『シュルレアリスム第二宣言』では、シュルレアリスムの思想は、我々の内部への下降であり禁じられた区域の永遠の散歩という方法で、我々の心的な力の全面的な回復を望む<sup>106)</sup>と述べている。シャルのこの理念への共感は、特にサドの参照という形で現われる。ブルトンもサドをサディズムにおいてシュルレアリストだとしている<sup>107)</sup>。シャルのサドへの関心は、シュルレアリスム参加以前からだが<sup>108)</sup>、シュルレアリスム参加の時代に最も豊かなサドに関する詩群を産んでいる。『革命に奉仕するシュルレアリスム』第二号（一九三〇年十月）には、モーリス・エヌの「サドの現代性<sup>109)</sup>」が掲載され、その後にシャルの「D.A.F.・ド・サドへの称賛」が載っている<sup>110)</sup>。シャルはサドに関する作品をシュルレアリスト達と共同の形で創造していることが分る。この作品ではサドは、「火<sup>111)</sup>」のメタファーで表わされているが、この「火<sup>112)</sup>」は「怪物的<sup>113)</sup>」であり「胸を引き裂くような真実を暗唱する<sup>114)</sup>」。そして、この真実に近づくために信じるべきものは「理性以上のもの<sup>115)</sup>」である。作品のⅢ<sup>116)</sup>は、この一部が後に『戦闘の詩』に初め「D.A.F.・ド・サドのビューマ<sup>117)</sup>」と題されていた詩の標題になるが<sup>118)</sup>「サド、天の泥からついに救われた愛、武器と目に銃殺された偽善、この遺産は人間たちが飢餓（*famine*）を避けるのに十分だろう [……]<sup>119)</sup>」と書かれている。ここではキリスト教と背徳の価値の転倒、さらにサドはシャルの創作にとって受け継ぐべきモデルで、それはサディズムによる人間の全体性の発見の豊饒さが、近代的精神の貧しさー「飢餓」ーに養分を与えるものだ、と述べられている。ここには、『シュルレアリスム宣言』の中の「ポエジーは我々の耐える貧しさ（*misères*）の補償を内に含む<sup>120)</sup>」という文の反響が読みとれよう。

『戦闘の詩』、『豊饒が訪れるだろう』ではサドへの参照は、より奔放で自在な魅力を持つ詩行を産み出している。暴力的なエロティスムを通じた真実への到達が、「体を利用して<sup>121)</sup>」の次の詩句の中に描かれている。

身体が若々しい時に  
しなやかで甘美な肉体が  
さまざまな色の上で  
かたくな意識の結晶の向う側で



濫費された暴力の枕もとで  
愛の熱気の中で  
成長するのを見るために  
やがて肉体が太陽の前を通過する時  
おそらく最後の単純な者は、光を体現するだろう。<sup>122)</sup>

サディズムを享受する肉体は、意識を超えた領域に存在する。この肉体が神秘的な次元にまで達する時、文明に対立する存在として示される「最後の単純な者 (le dernier simple) <sup>123)</sup>」は、光を具現化する。光はキリスト教において神を象徴するものであり、キリスト教を冒瀆しながらエロスによる真実への到達が示されている。この部分は、肉体の若々しさ、しなやかさ、甘美さ、色どり、豊かさ、熱さが感じられ、性的悦楽の喜びが描かれている。

しかし、サド詩篇は、ここで留まるものではない。この部分の前には、

眠りながらペシミズムを打ち建てるのは精神の役割だ。<sup>124)</sup>

と書かれている。「眠りながら <sup>125)</sup>」の部分は通常の意識の外で、と解釈できる。「ペシミズム <sup>126)</sup>」については、シャルが先に引用した「D.A.F.・ド・サドのピューマ」の最後の二行「ひきがえる、死に至る眠り、黒い水の下の水のような／丸裸にされたばらの帝国 <sup>127)</sup>」を、手紙の中で解説しているのを参照する必要があるだろう。シャルはこの詩行を、精神病院に収容されたサドが差し出されたばらを傷めつけ、ひきがえるの多い危険な水に投げ入れたことを暗示しているとし、この行為を「至高のペシミズム <sup>128)</sup>」と評している。又「ひきがえる、死に至る眠り <sup>129)</sup>」はこの後のサドの死を示すものだとしている。すなわち、サディズムは通常美とされるもの、あるいは生命の価値を否定するほどのペシミズムである。そのためにサド詩篇には、「色欲 <sup>130)</sup>」の中の「餌食 <sup>131)</sup>」に付けられる“insensible (無感動な) <sup>132)</sup>”という形容詞、「歴史家の女 <sup>133)</sup>」の中の“Dans un ciel d'indifférence <sup>134)</sup>”に見られる“indifférence (無関心さ) <sup>135)</sup>”という名詞のように、非人間性を示す語が多く用いられている。想像力においてサドを追体験することは、生命から見て極限的な体験であり、そのために「眠り <sup>136)</sup>」には“fatal (死に至る) <sup>137)</sup>”という形容詞が付けられている。

## II. 言葉についての考察

### (1) 詩についての詩

シャルの大きな特徴の一つは、詩についての詩を書き続けたことである。この詩について考察した詩は、ブルトンの影響で大きく深化したように思われる。

#### ①書く行為における主体の分裂

作品は、何によって動かされているのか、それは意識あるいは心の中の意識以外の部分とどのような関係にあるのか、という問題はブルトンが鮮明に提起し、シャルはそれに影響されつつ独自に発展させているように思われる。

ブルトンは、『シュルレアリスム宣言』の中で、スーポーとの自動記述の試みを記した個所で、この試みの際、書かれた要素は、書いている者にとって、他の人にとってと同様無縁 (étrange) である、と書いている<sup>138)</sup>。すなわち、自動記述という条件下で、書く者の意識は、書かれたものに介入し、支配してはいない、ということになる。シャルにも同様の詩句が見られる。シャルは、「詩の精神<sup>139)</sup>」「提案－想起<sup>140)</sup>」のような詩論的特徴の強い作品をシュルレアリスムの雑誌に載せており<sup>141)</sup>、このことから詩論的特徴の強い作品をシュルレアリスムに呼応するものとして創作したように思われる。『革命に奉仕するシュルレアリスム』の四号 (一九三一年十二月) に載せられた「提案－想起」の中に、「詩人は、死の概念のほかに、この死の重さのすべてを自分の中に保持する。彼がそれを非難しないのは、この重さを彼に運ぶのは他者 (un autre) だからだ<sup>142)</sup>。[……]」と書かれている。明らかにランボーに由来する autre という言葉を使用しながら<sup>143)</sup>、シャルは詩を書く者の中に、心の中の意識以外の部分が介入していることを語っている。

シャルはこの「提案－想起」の中で、書く行為の中での主体の分裂を、他の形でも述べている。まず「しかし、ヴォワイヤンが信者を殺し、そして超自然がすぐに生じ、定着し、不可欠となるように<sup>144)</sup>。」さらに「ここで男性的なイマージュはたゆまず女性的イマージュを追い、あるいはその逆もある。これらのイマージュが互いに追いついた時、そこでは創造者 (créateur) の死と詩人の誕生だ<sup>145)</sup>。」すなわち、書く行為において、主体の中で「信者<sup>146)</sup>」が通常の世界を越えた世界を見る者に代わる。あるいは、ある表現が両性が結び合わされる時のように見事に成立した時には、創造する過程を追求していた自己は、「詩人<sup>147)</sup>」に代わる、と述べている。つまり、主体は多数に分裂している。ブルトンも又、一九三二年の『通底器』の中で、「個人は、自分自身と別れ、自分自身を斥け、弾劾しなければならず、他者たちのために自己を滅却しなければならず、その結果自分自身との合体の中で自分を再建できる<sup>148)</sup>」と書いている。ブルトンも主体の多数の分裂を書いているわけである。シャルとブルトンの共通の認識が確認される。

## ②恣意性や偶然と忍耐、直観と熟考の関係

前述したように、シャルはブルトンの影響下で、恣意性や偶然、あるいは直観を重視した。それらと対立する忍耐あるいは直観についての考え方は、ブルトンとシャルで違いが見られる。ブルトンは、『シュルレアリスム宣言』の中で、欲望をありのままに保つことを主張した後、挑発的な調子で、選別、競合、観念の人工的な秩序、危険への防御策などとともに、「長々とした忍耐 (longues patiences)」にも決別を宣言している<sup>149)</sup>。これに対し、シャルは早くから、恣意性や偶然あるいは直観のみを重視するわけではないことを表明している。「被験者の信条告白」にも「しかも私はこの超越的な明証性について熟考している (réfléchisse)。<sup>150)</sup>」と書かれており、又、「詩的精神」の中で「さまよう犬が必ずしも森に到り着くわけではない<sup>151)</sup>」と恣意性のみを

強調することに批判的な姿勢を示している。ブルトンは、『シュルレアリスム第二宣言』では、「現実と非現実、理性と狂気（*déraison*）、熟慮（*réflexion*）と衝動、知と『宿命的な』無知、有効性と無効性」の対立が弁証法によって解決される、と述べる<sup>152)</sup>。シャルはこうした対立が解決される、あるいは消滅する、という考え方を取らず、対立したまま、共存すると考える<sup>153)</sup>。例えば『闘争の詩』の中の「詩の成就<sup>154)</sup>」では「偶然の詩（*Poème accidentel*）<sup>155)</sup>」という詩行と「忍耐の太陽（*soleil de patience*）<sup>156)</sup>」という詩行が、間に二行をはさんで共存している。ブルトンは、一九三二年の『通底器』では、詩人は合理的認識による直観的認識への訴訟において、この論争を終わらせる決定的書類を提出する、としている<sup>157)</sup>。シャルは、一九三六年の『ムーラン・ブルミエ』において、熟考と直観についての細かな表現に達している。この十一番目の断章を見てみよう。「鍵を握る者である直観は、高所の檻を突き抜けながら、詩の生まれかけの形式の束を震わせることを忘れないのだから、私は直観が思考し秩序を規定することを認める。それらの檻では、木霊、すなわち、通りすがりに檻を濡らし受胎させる、特に選ばれた、驚異の先駆的状态が眠っている<sup>158)</sup>。」シャルは詩の生まれてくる状態を細心に記述する。驚異も又まだその前の状態で、それが書く者に対し働きかける様子が、性的なメタファーで描かれる。この働きかけを受けながら、やはりまだ誕生しかけの状況の詩を震わせるのは直観である。だからこそ直観こそが「鍵を握る者<sup>159)</sup>」なのだ。ここにも、直観を最も重視する見解が見られる。しかし、熟考が捨て去られているのではない。直観が「思考し、秩序を規定する（*raisonne et dicte des ordres*）<sup>160)</sup>」のである。すなわち、直観が熟考の機能と結合されている。同様に五番目の断章では「自分をよりよく認めさせるために、論理（*la logique*）は、時折、不合理（*l'absurde*）の特徴を帯びる。それは、コラージュというよりは、むしろ接ぎ木だ<sup>161)</sup>」と書かれている。論理と不合理との区分が消え去るのではなく、あるいは、矛盾は乗り越えられるのではなく、矛盾したまま、異質なものとして「接ぎ木<sup>162)</sup>」のように固定されて共存する。シャルは『ムーラン・ブルミエ』において矛盾し合うものの異質性の肯定という原則を鮮明にする。そしてこの原則に従い熟考と直観の共存を基盤とする詩学を確立する。

### ③断片化

シャルは、『ムーラン・ブルミエ』において初めて詩集全体を断章形式にする。断片化は、シャルにとってもととの傾向であったようだ。『兵器庫』の初版の「死の物語は詩の形式を取る」も一行が一節を作る詩行が多用され、詩は断片化の傾向を見せている<sup>163)</sup>。しかし、シュルレアリスム参加の時代の詩論的な詩は、断片化されている詩と、そうでない詩が混在している。「詩的精神<sup>164)</sup>」は断片化されており、「提案－想起<sup>165)</sup>」は断片化されていない。そして「提案－想起」の一部は、時折いくらか変更されたうえで、断片化されて『ムーラン・ブルミエ』に収録される<sup>166)</sup>。つまり、『ムーラン・ブルミエ』で詩人は極めて意識的に断章形式を採用したように思われる。シャルは『戦闘の詩』が書かれた一九三一年から三二年頃、「体系（*système*）」に対する批判を何度も表明する。例えば『闘牛の馬<sup>167)</sup>』には、「鉄の手薬指の／プラチナの結婚指輪に似たあらゆる地点で／できものがゆっくり、どろどろに溶ける。／これが*système*だ<sup>168)</sup>」とい

う詩句が見られる。ブルトンは『シュルレアリスム第二宣言』では、史的唯物論に立脚すると表明し、特にエンゲルスの『アンチ・デューリング論』を援用している。この立場から、ブルトンは「体系 (système)」という言葉で、次のように使用している。「ヘーゲル以後、自分の利益のためだけに働き、又自分自身のことだけを熟考しようとする意志の原則が、思考そのものの中に残す空白を満たさずにいられるイデオロギーの体系など、ただちに崩れ去らずには存在しない<sup>169)</sup>。」すなわち「体系 (système)」はブルトンが立脚する基本概念である。シャルは、こうした思想の確固とした一貫性としての体系そのものに疑念を表明しているように思われる。『豊饒が訪れるだろう』の「統合 (intégration)<sup>170)</sup>」の標題の推移は、この点で示唆的である。この詩は四つの節で分けられ、一つの節の中でも、文は強い断続性を見せている。この詩の草稿には、標題を「分割 (séparation)」から「統合 (intégration)」に変えた跡が残っている<sup>171)</sup>。この変更は統合を作り出すために、まず断片化しなければならない、という考えを示しているように思われる。矛盾あるいは異質性をそのまま保つために、意味の連続性よりも断続性を選択する。そのためにシャルは断片化という形式を採用しているのである。『ムーラン・プルミエ』の三八番目の断章には「詩人は、時代遅れの周囲の人々の敵意には無頓着に、態勢を整え、自分の精力を鎮め、言葉を分割し (morcelle le terme)、頂上に翼で釘を打つ<sup>172)</sup>」と書かれている。断片化は、シャルにとって、時代に適合するための手段だ、と表明しているように思われる。

### III. 詩と現実

シャルは『豊饒が訪れるだろう』の最後の詩「前方に<sup>173)</sup>」で「現実 (réalité)<sup>174)</sup>」の語を使用している。「そんなふうに、荒屋では、計略が凌われ、腐敗は刺激されて、目も眩む爆発となった。お言い表しようもないほど汚れて！労働者の現実に減刑された狂人の眠り [……]<sup>175)</sup>。」マテューは、この「目も眩む爆発」を革命的な暴動の意味に解釈している<sup>176)</sup>。この詩集にはサドへの暗示がたびたび見られ、「狂人の眠り<sup>177)</sup>」も、サドの像を反映し、サドの狂気の中の夢想と考えられる。ブルトンは『シュルレアリスム第二宣言』の中で、マルクス主義にもとづく革命の到来を希望している<sup>178)</sup>。ブルトンがこの本の中で「想像的なもの (l'imaginaire)<sup>179)</sup>」と対立し知覚されるものとしている「現実 (le réel)<sup>180)</sup>」は、こうした変革されるべき社会という意味を持っている。ブルトンはさらに『通底器』の中で変革すべき現在の世界は個人の無意識から昇ってくる、腐敗をもたらす、濁った泡からできている<sup>181)</sup>とも述べている。シャルの「前方に<sup>182)</sup>」の中の引用した節はブルトンのこうした考え方を反映しているように思われる。すなわち、世界のゆがみは個人の無意識のゆがみによってもたらされるのだから、労働者たちの悲惨な現実も個人の無意識の腐敗の結果である。それならば、無意識が顕在化したものである狂気は、サドの精神病院への監禁の例のように、社会によって一方的に断罪されるべきではない、と述べているように思われる。このように、『豊饒が訪れるだろう』の中に現われている「現実」はブルトンの影響が強いように思われる。

『ムーラン・ブルミエ』では、「現実」は詩集の最も重要な概念の一つになっている。そして、ブルトンから受け継ぐものと、シャルの独自の姿勢とが明確になっているように思われる。この詩集では、何よりもまず、「現実」に固執しよう<sup>183)</sup>という主張が現われている。この詩集の大部分が書かれたのは一九三六年春であり、八月半ばから九月半ばにはほぼ完成している。一九三五年五月に仏ソ相互援助条約が調印され、三六年七月にスペインでフランコのクーデターがあったように、ファシズムの脅威が増大し、大戦の危機が迫っている。「現実」に固執するシャルは「人類の目に見えぬ諸機構の審判の日<sup>184)</sup>」というように、この危機的状況を、あるいは「血は波止場に接岸している<sup>185)</sup>」というように、時代の暴力性を描き出している<sup>186)</sup>。

そして詩の目的はこの現実の認識であることが、「支柱 (étais)<sup>187)</sup>」という標題によって詩集全体の支えとなる意図が示されている冒頭の詩で述べられる。ブルトンは、『通底器』の中で世界を変革する活動と解釈する活動とを結びつけることを主張している<sup>188)</sup>。しかし、シャルは、現実を認識することそのものを第一義としている。そしてこの認識は「涙に濡れた複雑な尺度、策略の陽気な建設<sup>189)</sup>」によっては得られないとし、詩の人工的な複雑さを退け、「野蛮 (grossier) から引き出される／ある種の臨時的段階的な激動<sup>190)</sup>」によって得られるとしている。「野蛮<sup>191)</sup>」が重視されているのは、シャルがここでもブルトンの主張を受け継いでいるからであろう。しかし、同時に「段階的な (graduée)<sup>192)</sup>」と述べられ、又、この続きで「激動の活動停止<sup>193)</sup>」のもとでは「構成 (ordonnance)<sup>194)</sup>」が確立される、と書かれているように、理性的な要素も必要とされている。さらに、この構成が満足すべきものとなるのは「価値の選択<sup>195)</sup>」による、とされ、又「現実」を「実際に体験された (vécue)<sup>196)</sup>」ものとして受け入れることを求めている。すなわち、一つの行動を選択することが必要とされている。

このように、シャルは『ムーラン・ブルミエ』において、行動を明示するようになる。二十一番目の断章には、「詩人は、行動の人間より先に現われ、ついで彼に出会うと、戦いを宣言する<sup>197)</sup>」と書かれている。自己を詩人と行動する人間に二分する書き方は、先に引用したブルトンの変革活動と解釈の活動、あるいは、『シュルレアリスム第二宣言』の現実と想像的なものの二分法の影響が感じられる。しかし、ここでもブルトンが、変革活動と解釈の活動を「統合する (synthétique)」態度を追求し<sup>198)</sup>、あるいは現実と想像的なものの対立が消失することを求めている<sup>199)</sup>のに対し、シャルは、自己の内面の二つの矛盾する側面が対立し合うまま共存することを強調している。

最後に注目したいのは、『ムーラン・ブルミエ』においては、「現実」の語が「詩」と直接結びつくことである。「どんな要請に対しても、一篇の詩が [……] 効果的に自己を確認すること (se confirmer)、すなわち、詩の彷徨を供給することができ、詩の言語を絶する現実の証拠を私にもたらすことができるように<sup>200)</sup>。」詩は現実の認識でなければならない、そのためにこの時のシャルは一つの行動の選択を必要としている。しかし、それで十分なのではない。詩が作品として成立するためには、「詩」が現実である「証拠<sup>201)</sup>」を示さなければならない。詩の証拠を示すことは、詩がもたらす結果によって、あるいは倫理的になされるのではない。それは詩が自分自身を確認することによってのみ可能になる。言葉としての厳密さの追求のみが詩を作品として成立さ

せる。『ムーラン・ブルミエ』はこのように言葉のこの上ない重視と現実の直視との均衡によって、シャルの独自な出発点となっているように思われる。又「現実」という言葉そのものが、社会的な意味から、存在そのものに関する、より幅広い意味を持つようになっていることが分る。

## 結 論

以上のように、ルネ・シャルは、まず参加当初、ブルトンの「自由」の呼びかけに答え、表現における自由、合理的なるものからの自由、西洋近代文明、キリスト教、道徳からの自由、さらに社会的自由が真に獲得されることを期待する。ブルトンの提唱する科学的方法意識については、当初から批判的だが、中には夢のレシとして書かれた作品のように、豊かな成果となっているものも見られる。シャルはむしろ、ブルトンの主張する恣意性、偶然、直観の重視などの理念に強く共感し、想像力による欲望の解放を詩作の上で実践し、サドを参照する作品群を産んでいる。

一方、ブルトンの影響で、書く行為についての考察を深めているように思われる。しかし又、恣意性、偶然、直観と共に忍耐、熟考を尊重することも主張する。さらに、ブルトンの「体系」の重視に反対し、作品を断片化する。

シャルはシュルレアリスム参加の後期にも、「現実」の語をブルトンに倣って変革すべき社会として使用する。しかし、「現実」は『ムーラン・ブルミエ』では、最も重要な概念となり、詩の目的は、ブルトンと異なり「現実」の認識そのものとなる。「現実」の語も、より幅広い意味を持つようになる。そして「現実」の認識のための実際の行動の選択が必要とされるが同時に、詩は詩によってのみ確認されるべきであるという言葉への厳格な姿勢も強調される。

このような、言葉そのもののこの上ない重視はシャルの重要な特質であるように思われる。例えば、『アルティヌ』の中でも、アルティヌは、街の「名」を横切る<sup>202)</sup>。シャルにおける物と言葉の関係について考察するのも、興味深い主題のように思われる。

## 注

ルネ・シャルの作品からの引用は、原則として、初版の形で作品を収録している René Char, *Dans l'atelier du poète*, édition établie par Marie-Claude Char, Gallimard, «Collection Quarto», 1996 (以下 D.A.と略す) による。翻訳は既訳のあるものについては参照させて頂いたが、原則として拙訳である。

- 1) シャールは一九二八年二月二十日に処女詩集『心の上の鐘』を Editions Le Rouge et le Noir から出版しているが、後にその大部分を破棄している。(D.A. p. 42 参照)
- 2) Jean-Claude Mathieu, *La Poésie de René Char ou le sel de la splendeur*, José Corti, 1988, (以下 P.R.と略す) p. 79.
- 3) René Char, *Œuvres Complètes*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1995, (以下 O.C.と略す)

p. LXXXVI.

- 4) P.R., pp. 71-72.
- 5) O.C., p. LXVI.
- 6) O.C., p. LXVII.
- 7) D.A., p. 167.
- 8) O.C., p. LXVIII.
- 9) D.A., pp. 227-229.
- 10) O.C., p. LXX.
- 11) ジョルジュ・ムナンは、その著 *Avez-vous lu Char ?*, Gallimard, 1947, (以下 A.V. と略す) で、シュルレアリスム参加という集団的経験は、シャールに大きな解放をもたらした、と述べている。(A.V., p. 68.)
- 12) D.A., p. 96.
- 13) 『シュルレアリスム宣言』はシャールがシュルレアリスムに参加した1929年に第二版がでているので、これをテキストとする。André Breton, *Manifeste du surréalisme, Poisson Solubre: Nouvelle édition augmentée d'une préface et de la lettre aux voyantes, Frontispice de Max Ernst*, Kra, «Les documentaires», Paris, 1929 (以下 M.P. と略す), p. 13.
- 14) M.P., p. 13.
- 15) D.A., p. 97.
- 16) D.A., pp. 123-125.
- 17) D.A., p. 124.
- 18) D.A., pp. 159-160.
- 19) D.A., p. 128.
- 20) D.A., p. 124.
- 21) D.A., p. 123.
- 22) D.A., p. 128.
- 23) D.A., p. 124.
- 24) ~ 26) D.A., p. 123.
- 27) André Breton, *Œuvres Complètes*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», (以下 A.O. と略す), 1988, t.I., p. 785.
- 28) A.O., t.I., p. 809.
- 29) A.O., t.I., p. 785.
- 30) ~ 34) M.P., p. 21.
- 35) M.P., p. 61.
- 36) ~ 38) M.P., p. 73.
- 39) A.O., t.I., p. 788.
- 40) A.O., t.I., p. 785.
- 41) A.O., t.I., p. 791.
- 42) M.P., p. 73.
- 43) 一九二一年から一九二四年までに、*La Psychanalyse, Cinq leçons sur la psychanalyse, Introduction à la psychanalyse, Trois essais sur la théorie de la sexualité, La Psychopathologie de la vie quotidienne, Totem et tabou, Essais de psychanalyse appliquée, Psychologie collective et analyse du moi* が出版されている。(A.O., t.I., p. 1347.)
- 44) M.P., pp. 21-22.
- 45) D.A., p. 97.

- 46) ~ 49) D.A., p. 96.
- 50) ~ 55) D.A., p. 97.
- 56) A.O., t.I., pp. 276-279.
- 57) D.A., p. 162.
- 58) A.V., p. 84.
- 59) D.A., p. 162.
- 60) P.R., t.II., p. 291.
- 61) Paul Veyne, *René Char en ses poèmes*, coll. «Les Essais», NRF, 1990, p. 100.
- 62) M.P., p. 27.
- 63) D.A., p. 200.
- 64) A.O., t.II., p. 193.
- 65) P.R., pp. 261-262.
- 66) D.A., pp. 200-204.
- 67) D.A., pp. 242-243.
- 68) ~ 70) D.A., p. 243.
- 71) ただし、シャルとブルトン、エリュアールの共作の詩集『工事中、徐行せよ』のブルトンの序文には、この詩集が自動記述の方法で書かれたと取り得る記述がある。(D.A., p. 177)
- 72) M.P., p. 41.
- 73) M.P., p. 46.
- 74) M.P., p. 52.
- 75) A.O., t.II., pp. 68-70.
- 76) A.O., t.II., p. 68.
- 77) ~ 83) A.O., t.II., p. 68.
- 84) ~ 88) A.O., t.II., p. 69.
- 89) A.O., t.II., p. 70.
- 90) D.A., p. 144.
- 91) D.A., p. 146.
- 92) P.R., p. 147.
- 93) D.A., pp. 194-195.
- 94) D.A., p. 195.
- 95) D.A., p. 195.
- 96) M.P., p. 64.
- 97) M.P., p. 26.
- 98) D.A., p. 147.
- 99) D.A., p. 161.
- 100) A.O., t.II., p. 203.
- 101) D.A., pp. 168-169.
- 102) D.A., p. 168.
- 103) M.P., p. 28.
- 104) M.P., p. 34.
- 105) M.P., p. 33.
- 106) A.O., t.I., p. 791.
- 107) M.P., p. 47.



- 108) 『兵器庫』の初版のエピグラフも、サドの『ゾロエと彼の二人の手下』から取られている。(D.A., p. 85)
- 109) ~ 110) D.A., p. 140.
- 111) ~ 115) D.A., p. 140.
- 116) D.A., p. 140.
- 117) D.A., p. 185.
- 118) P.R., t.II., p. 295.
- 119) D.A., p. 140.
- 120) M.P., p. 34.
- 121) D.A., pp. 182-183.
- 122) D.A., p. 183.
- 123) D.A., p. 183.
- 124) D.A., p. 183.
- 125) D.A., p. 183.
- 126) D.A., p. 183.
- 127) D.A., p. 185.
- 128) D.A., p. 184.
- 129) D.A., p. 185.
- 130) ~ 132) D.A., p. 176.
- 133) ~ 135) D.A., p. 184.
- 136) ~ 137) D.A., p. 185.
- 138) M.P., p. 43.
- 139) D.A., pp. 160-162.
- 140) D.A., p. 165.
- 141) D.A., p. 164.
- 142) D.A., p. 165.
- 143) ランボーの一八七一年五月十五日付のポール・ドメニー宛の手紙の中の「私とは一個の他者です」を踏まえている。Arthur Rimbaud, *Œuvres*, Garnier, 1987, p. 347.
- 144) D.A., p. 165.
- 145) D.A., p. 165.
- 146) D.A., p. 165.
- 147) D.A., p. 165.
- 148) A.O., t.II., p. 198.
- 149) M.P., p. 34.
- 150) D.A., p. 97.
- 151) D.A., p. 161.
- 152) A.O., t.I., p. 793.
- 153) ジャン・クロード＝マテューは、“Breton, Char : la contradiction” in *René Char 10 ans après*, l'Harmattan, 2000の中で、ブルトンとシャルにおける contradiction について全般的に詳しく分析し、ブルトンは二項の対立をヘーゲル、マルクスに基づいて弁証法的に解決しようとし、シャルはヘラクレイトス、ニーチェに基づいて二項の対立をそのまま受け入れ生成の運動の中に導き入れようとしている、と述べている。
- 154) ~ 156) D.A., p. 189.
- 157) A.O., t.II., p. 208.

- 158) ~ 160) *D.A.*, p. 239.
- 161) ~ 162) *D.A.*, p. 238.
- 163) *D.A.*, pp. 93-94.
- 164) *D.A.*, pp. 160-162.
- 165) *D.A.*, p. 165.
- 166) 例えば後で引用する詩人の探究の間の座礁について語る三十八番目の断章は、「提案－想起」からそのまま取られている。(D.A., p. 245)
- 167) *D.A.*, pp. 174-175.
- 168) *D.A.*, p. 174.
- 169) *A.O.*, t.I., p. 792.
- 170) *D.A.*, p. 214.
- 171) *P.R.*, t.II., p. 301.
- 172) *D.A.*, p. 245.
- 173) ~ 175) *D.A.*, p. 215.
- 176) *P.R.*, t.I., p. 260
- 177) *D.A.*, p. 245.
- 178) *A.O.*, t.I., p. 791.
- 179) ~ 180) *A.O.*, t.I., p. 781.
- 181) *A.O.*, t.II., p. 196.
- 182) *D.A.*, p. 215.
- 183) *D.A.*, p. 240.
- 184) *D.A.*, p. 240.
- 185) *D.A.*, p. 243.
- 186) *P.R.*, t.I., p. 318.
- 187) *D.A.*, pp. 237-238.
- 188) *A.O.*, t.II., pp. 193-195.
- 189) ~ 195) *D.A.*, p. 237.
- 196) *D.A.*, p. 238.
- 197) *D.A.*, p. 241.
- 198) *A.O.*, t.II., p. 193.
- 199) *A.O.*, t.I., p. 781.
- 200) ~ 201) *D.A.*, p. 248.
- 202) *D.A.*, p. 144.